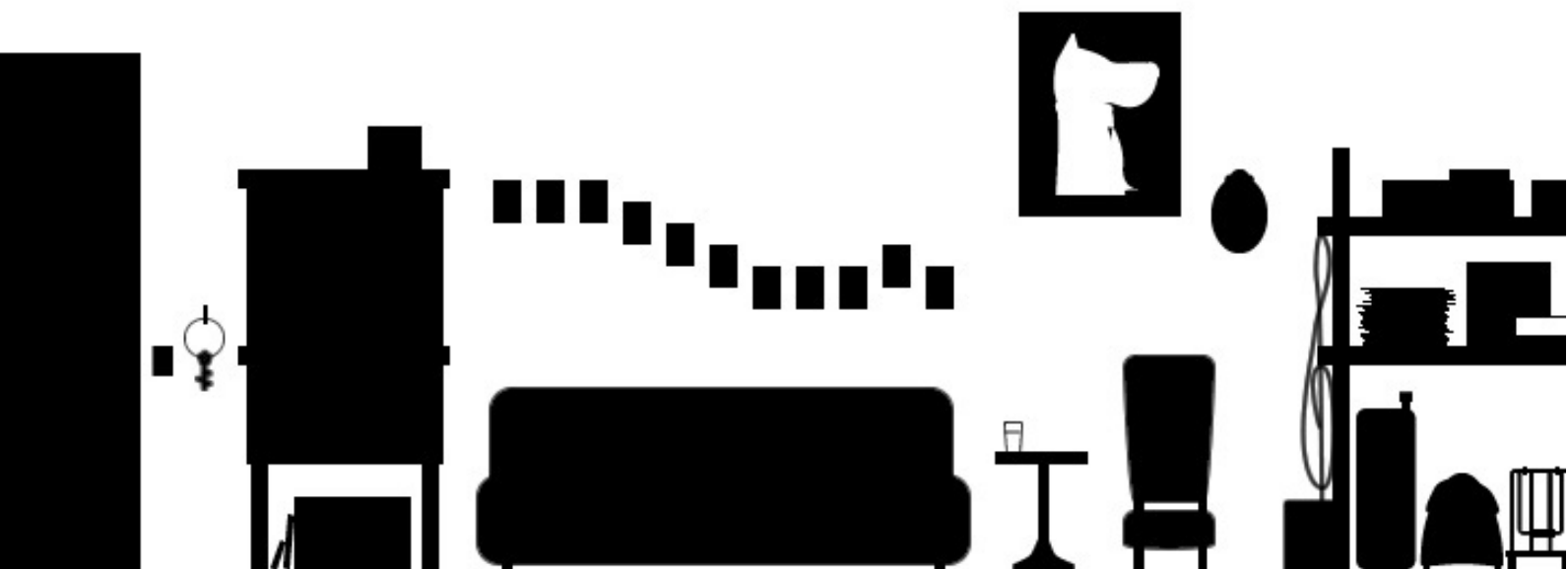


シュー・プライミール

Shoe Primeval



私と彼女

昔付き合っていた彼女は、フェミニンなショートヘアの可愛らしい子でした。

私も彼女も小柄で、服の貸し借りができるくらい体格が似ていました。

歳も血液型もバイセクシャルであることも同じで、ピンとくるものも一緒でした。

2人でいる時は、よく笑っていました。

おしゃべりが楽しくて、自分のこと、友達のこと、仕事のこと等々、本音の隅っこまで共有していました。

言葉に出さなくても分かり合えるとか、別々のことをしていても愛し合っていると感じられる関係も素敵ですが、私は彼女との隠し事のない関係がとても好きでした。

一度も喧嘩をしませんでしたし、嫉妬やヤキモチで相手を煩わせるようなこともお互いにありませんでした。

大親友の延長みたいな、理想的なカップルだったと思います。

彼女と付き合っていたのはずっと昔で、女同士で生きていくにはまだまだ難しい時代でしたが、今でもお互いに尊敬しあっていて、世界中で最も『幸せであってほしい人』です。

デート1

彼女とは友達の期間が長かったので、友達なのか恋人なのか分からない期間がありました。

そんなボンヤリした関係の頃、彼女から何回目かのデートに誘われました。

記念日というわけではありませんでしたが、たまには奮発して美味しいものでも食べようかということになり、高層階のレストランで食事をしました。

食後はガラス張りのビリヤード場で遊び、2人で夜景を眺めました。

大人ならいいムードになりそうなタイミングですが、私達はいつものように他愛のない話で大笑いしていました。

あの黄色い光が私の家だとか、あの青い光が通っていた小学校だとか、同級生の田中くんは鉄棒で悟りを開いたとか。

本当は見えるはずのない場所ですが、創作の思い出話はなんとも心地よい時間を与えてくれました。

そんな中、彼女が珍しく黙りました。

私達の間には沈黙というものがほとんどありませんでしたから、なんだろうと思って彼女が話し出すのを待っていました。

少しすると、彼女は俯きました。

「今日はスカートを履いてきたの」

聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声でしたが、彼女の言葉にあわせて視線を落とすと、確かにスカートを履いていました。

はじめしてみる淡い白色のフレアスカートで、彼女が動く度に裾がヒラヒラと揺れました。

その時の、彼女の照れた顔や言葉を思い出すと、今でも胸がクツとなります。

なんて、なんて可愛いのだろうと思いました。

緊張する

私たちは、いわゆるフェミ×フェミカップルで、どちらが男役とかそういった役割分担はありませんでした。

視線も役割も同じ。

男女の恋愛では、「違いがあるから惹かれあう」とか「役割分担する方が上手くいく」と言いま

すが、同じ役割を持っていると優しい関係を築くことができます。

相手が何を言えば喜ぶか、悲しむか、とてもよく分かります。

あまり似ているとドキドキしなくなるのでは？と思うかもしれませんが、それとこれとは別です。

ドキドキするのは、違いがあるからではなく、好きだからです。

嫌われたくないとか、良いところを見せたいとか、傷つけないとか、分かりあいたいと思うから、ドキドキするのです。

私はよく彼女にドキドキしていました。

デート2

別の日、私達はドライブデートをしました。

その日は午前中に待ち合わせをして、海の近くまで行きました。

風の強い日で、宇宙まで飛ばされるだの、飛ばされたらどうやって地球へ戻るかだの、そんな話をしていたと思います。

展望台にあがって海原に感心していると、彼女がまた俯きました。

「髪ね、ちょっとだけ切ったの」

照れくさそうに髪を触っている姿を見て、なんとも愛しい気持ちになりました。

私が「似合っているね」というと、彼女は「でへへ」と声に出して笑っていました。

デート3

初めて一緒に夜を過ごした時、服を脱いだ彼女は下着を手で隠しました。

私は心の中で、「そうか。恥ずかしいか。そうか。」と思っていました。

正直、浮かれていました。

見たい。触りたい。

見たからといってどうなるものではないと分かっているけど見たいし、触りたい。

男性はそういった欲求を「男の本能」と言いますが、男性特有のものでないことを私はよく知っています。

私が平静を装いながらそんな格闘をしていると、彼女がまた俯きました。

「この下着、可愛いと思って」

彼女が身につけていたのは、ビロード生地の可愛らしいブラセットでした。

「すごく可愛いね」と言うと、彼女はまた「でへへ」と照れ笑いしました。

私が好みを訊ねると、「優しくされると...嬉しくなる」と彼女は答えました。

その「優しくされると」という言葉の魔力は絶大で、我を忘れてしまいそうでしたが、ぐっと堪えました。

堪えて堪えて、彼女を幸せにすることに全力を注ぎましたが、後になって、もっとうまくできたのではないかと反省しました。

好きな相手に対して完璧であるのはとても難しいです。

電話

あるとき、彼女が電話越しに「好きって言って」と言いました。

私が外にいるのを知ってわざと言ったのです。

そんなこと言う子ではなかったので、何かあったのかと少し心配になりました。

もしそれをいったのが男性だったなら、「何故そんなありきたりな事を要求するのかね」と少し冷めた感情になっていたかもしれませんが、相手が女の子となると、どうも違います。

ただ、私は恋愛にギャラリーを必要としませんから、彼女の要求には応えられません。

うまい言葉が見つからず笑って濁そうとする私に、彼女は「困るでしょ？」と言いました。

その時の気持ちを正直にいうと、「うーん」という感じでした。

困るかと問われれば困っていたのですが、何か急に課題を出されたかのような、焦りの方が強かったです。

迷惑というわけではないけれど、要求にも答えられないし、何より、なぜ急にそんな事を言い出したのかがわからなくて、戸惑っていたのだと思います。

単なる気まぐれだったのかもしれませんが、もし彼女がこの恋愛をステップアップさせたいと思っ
て言っているのなら...少し可愛いなと思いました。

面倒

女性はこういう時の男性心理に対し、卑屈になることがあります。

「面倒くさい女だと思われるんじゃないか・・・」「甘えを受け止めてくれる男性は限られている」など。

実際、自分が甘えたいタイプの男性は多いです。

昔は「男は外で働いているから、家や彼女は安心できる場所であってほしいんだ」という理屈がまかり通っていましたが、現在のように女性も男性と変わらない労働をする時代でその理屈は通用しません。

お互い同じくらい疲れているし、甘えたいのです。

男性も色々ですが、甘えを迷惑と感じるかどうかは個人差によるところが大きいです。

女性からすると、戸惑い＝面倒くさい＝相手が逃げる（嫌われる）、という図式が浮かんでくるかもしれませんが、戸惑い＝面倒くさい、ではありません。

あたかも全ての人がそうであるかのように指南する人もいますが、それはごく一部の人の解釈です。

戸惑いはどこまでいっても戸惑いであり、咄嗟の出来事に対応できずにプチパニックを起こしているだけのことです。

恋愛感情とは別物ですから、無駄に追及してはいけません。

戸惑いを極端に嫌がるのはプライドの高い人で、そのコントロールのきかない状態を嫌います。

ここで大事なのは、プライドが低い人だけではなく、プライドの高い人も高確率で人を裏切るということです。

プライドの高い人は自分が相手をコントロールできている状態を良しとします。

自分の幸せを最優先させるタイプといってもいいでしょう。

そういった人達は遠距離から接触している分にはシャキットとしていて良いですが、近距離で真剣なお付き合いをすると、自分のスタイルを崩せないのが厄介です。

高値の華や手に入り難いものには興味がわくものですが、「手が出せない」のも「手を出さない」のも実は紙一重です。

人が手を出さないもの、出されないものには、それだけの理由や未成熟さがあったりもします。

時間を無駄にしないためには、そこら辺の見極めは重要です。

男目線・女目線

私には男性の気持ちも女性の気持ちも分かりません。

私に分かるのは、私の感じたことだけです。

ただ、恋愛相談などを聞いていると、男女どちらの感覚にも体感があることに気づきます。

追い詰められる男性の感覚も、不安になる女性の感覚も、よくわかります。

男性の同性愛者には、「男性はピュア。女性は底意地が悪い。」という感覚を持っている人がいます。

男性の中には戦争を起こしたり性犯罪をおこしたりする人も存在しますが、半分以上のまともな人達は、確かにある種のピュアさを持っている気がしていました。

私が男性しか知らなかった頃は。

しかし、どちらの立場も経験してみると、人間の持つ感覚のほとんどは、男女差ではなく役割から生まれる個人差であると分かります。

男女で表現方法に多少の違いはありますが、大抵の場合、人間は同じ状況におかれると同じような思考や行動に至ります。

偏見の中から偏見が生まれることはよくあることなので、注意したいところです。

学んだこと

私が彼女とのこれらの出来事から学んだことは、『言われないと気づかない』、ということです。

実のところ、私は彼女のスカートも髪も下着も、言われるまで全く気づきませんでした。

気づけば愛しくてたまらなくなるのですが、自力では最後まで気づかなかったかもしれません。

もちろん、だからといって関心が無いわけではありません。

私は見た目より中身を重視する方ですが、自分も人並みには身なりを気にしますから、相手がお洒落をしてくれば分かります。

髪を切ったら気づいてくれる人がいてもいいよとか、できれば褒められたいとか、そういった欲求は私だって持っています。

それでも、気づかないのです。

こちらから気付くのがベストだと分かっているのに、自己報告が積み重なればどんな寂しい気持ちになるのか承知しているのに、気づけないのです。

なぜなら、会えて浮かれているからです。

何回会っても、好きな人と一緒にいる時は、少し舞い上がっているのです。

冷静になんてなれません。

表現というのは思いの強さではなくテクニックに左右されるものですから、好きであればあるほど、うまく表現できなかつたりします。

逆をいうと、思い通りの表現ができる人はすごく冷静な状態にあるということです。

言ってしまうえば、それは駆け引きであり、遊びのテクニックです。

だから、会って直ぐに髪型の違いに気づくような人を、私は信用しません。

上手に褒められる度に、ああこの人の心は今ここにはないのだな、と感じるのです。

人を本当に好きになると、理由なんて考える暇もなく浮かれてしまうわけで、会っているだけで嬉しくて、ただ楽しくて、ずっと一緒にいたくなります。

それが全てで、後は頑張って装った平静です。

でも、きっとそんな説明を男性からされても私は信じません。

自分のことばかりで気が回らない人だなと思うかもしれません。

女性と男性とでは何かが違うのです。

何かとは何であるか...ケースによりけりではありますが、たぶん『信頼』です。

男性は浮気をする時、

「俺が浮気をしているこの時間、もしかして彼女も浮気をしているのでは？」

と思う人は少ないです。

私を知る限り、彼氏が浮気をしている最中に彼女が浮気をしている確率が高いですが、なぜか男性はそういった危機感を持ちません。

別に浮気されてもいいやと思っているのなら分かりますが、多くの男性は、自分の気の多さは許されるべきだと考えていても、パートナーに対しては厳しいものです。

しかし、女性の場合はこういったリスクを理解しながら浮気をしている人がわりといます。

この男女の差は、これまで担ってきた役割から生まれたものなので、男女の役割が逆転している関係では全く逆のことが起こります。

とはいえ、現状はやはり男性の方が詰が甘いです。

それは男性がどうというよりも女性の信頼度が高いのでしょう。

そしてなぜ信頼度が高いかといえば、これまで女性は人生の選択肢を奪われてきたからです。

逃げたくても逃げようがない、虐げられても我慢するしかない、そういう人生を多くの女性が送ってきました。

女性はある意味、奴隷として生かされてきたのです。

国というものが力を持って以来、奴隷でない国民がどれほどいたかは分かりませんが、女性に選択肢が少なかったのは事実です。

「そんなの昔の話でしょ」と思う方がいるかもしれませんが、まだまだ女性の地位は確立していません。

たとえば先日、30代後半の男性が

「昭和は良かったね。飲み会にいけば、女の胸なんて揉み放題だったよ。今はみんな不寛容で、なんとも息苦しい時代だ」

と言っていました。

また別の40代男性は、

「レズビアン？AVで見る分には沢山の女の裸が見れてお得だけど、実際の付き合いでは物足りないだろう？だって入れるものが付いていないんだから」

と言っていました。

年代に関わらず、こういう感覚を持っている男性はまだいます。

「女は男がいないと生きていけない。少々面倒をかけられても我慢して世話をすれば快樂を与えられるのだから喜びなさい」、そう信じている人達です。

特定の性癖を持った女性でもない限り、女性を人間として扱わない彼らを人間として扱うのは難しいです。

私が『彼女』の我儘を聞き入れられたのは、それが愛情と直結していることを信用できたからです。

女性も色々ではありますが、私が付き合った相手に限って言えば、お金目当てや体目当てということはありませんでしたから、どっぷり信頼して、愛を育むことに注力できました。

そういう関係では喧嘩が不要なのも当たり前です。

それは男女の駆け引きが安っぽく思えるほど心地良い関係です。

リスク

相手が男性の場合、女性にはどうしてもリスクが付き纏います。

たとえ結婚していても、そのリスクは変わりません。

女性同士ではリスクが同等なのに対し、男女の関係では、女性側のリスクの方が圧倒的に重いです。

性病の後遺症、妊娠・出産による仕事上のデメリット、共働きの家事等々、女性の負担は軽くありません。

浮気率は男性の方が高いですが、不倫相手に子供ができれば認知や離婚を迫られます。

不倫相手に養育費を払ったり、その子供に遺産を一部奪われたりします。

男性に責任をとらせることは必要ですが、不倫された上に財産まで奪われてしまう家族は二重苦三重苦を背負わされます。

かといって、離婚をしても慰謝料は微々たるものです。

実際、慰謝料や養育費は未払いとなるケースが多く、正直、正妻になったから安泰ということはありません。

どうしても理性では抑えがきかないというなら、用が済んだらパイプカットするなど物理的処置を施すのも良いのではないかと思います。一般化するのは難しいです。

著名人の中には、家事も子育てもしない男性や、浮気や不倫について大変寛容な意見を持っている人がいて、男性のだらしなさを「可愛らしさ」だと感じるだとか、「掌で転がしていればいい」という人がいますが、何のために男性を許すのか疑問です。

子供や老後のための結婚というなら愛はありませんし、愛があるなら浮気や不倫を許すことはできません。

「家族」というのは情愛で結ばれているものだという意見を聞くこともありますが、それは不幸であることの言い訳でしかありません。

もし許すことが家族の情愛であるならば、家族を傷つけないようにするのも情愛であるはずですが、

どちらかの都合しか考慮されない関係は、虐げられている一方の我慢の上に成り立っているのです。

それは単なるDVですから、不倫や浮気については刑事罰化するのが妥当だと言えるでしょう。

人が人を好きになるのは自由ですから、異性愛でも同性愛でもいいと思いますが、現実問題、女性が男性と生きるということは多くのデメリットがありますから、それを忘れないでおく方が失敗は少なくなると思います。